

The book cover features a layered, textured design. A piece of white paper with a torn edge is positioned in the upper right, displaying the large green characters '泉' (Fountain) and '集' (Collection). To the left of this, there are ink washes in shades of purple and blue, resembling bamboo or reeds. The title '金沢詩乃' is written vertically in a dark red, serif font, overlapping the ink washes and the white paper.

金沢詩乃

五行歌集

叙景歌の意義（自分にとっての）

第3作目は少しずつ書いていた実際の自然風景や心象的な風景を歌ったものの粗選（と言えるほど数はないけれど）が主になっている。

昔のmixi日記に、情景を歌うということについて自分にとっての意義みたいなものを綴っていたので、前書き代わりに抜粋する。

叙景歌をつくる時、その時見た山やせせらぎ
草の匂い、風のそよぎに言わば「手を貸してもらって」
歌になるような気がする。
私が楽器だとしたら、
自らの想いとなけなしの技術で歌を歌うが、
この場合は、外から感じた五感が内を通して指となり
風なら風の、山なら山の響きを奏でてくれるのだ。
抗わず、委ねて見えてくるもの。
こうした気付きは自然の中だけでなく
普段の雑多なくらしの中でもある。
もちろん恋のさなかでも。
それをわかりやすい形でドーンと提示してくれるのが
大いなる自然なのだろうか。
山の頂から望む、広大さ深遠さ、引っくるめたすべては
切なさにも似た感情だ。
それすらも抱ける気にさせてくれるのも
私もまた自然の一部だからなのか。

春想冬流

闇夜の羽化だ

もくれんの

白も

哀しみも

はばたいてゆく

陽が

すべての古傷に

じわじわ

くる

春先は辛い

芽吹きを

せかされ

吹く風は

つめたい

冬よりも

きつともつと

草のゆらぎに

誰かを

佇めば

信じたつていい

裏切らない

まばたき滲む

生が

ああ光だ

ここにある

いつかは

この身にも巡る

ぬくもりと

信じて

土肌に触れる

雨に

まあるく濡れた

たんぽぽの綿毛

まだ見ぬ夏の

夢

陽差しに

からからの大地が

ラベンダーの

香りに

癒されるのを待つ

葉を手で擦っても

香り立つ

ほう、と

見上げる空の

うすむらさきよ

今時期

咲くはずのない花を

ふと思う

エゾエンゴサク

冬空の青

山々の

原生林に

形に添って

響くのは

氷が織り成す

凍り尽きての

結晶の

無言の

森

こだま

無感動な

馬と

北国のひと

老人

大地に

雪原に横たわる

綺麗事は

永遠を

根付かない

進む

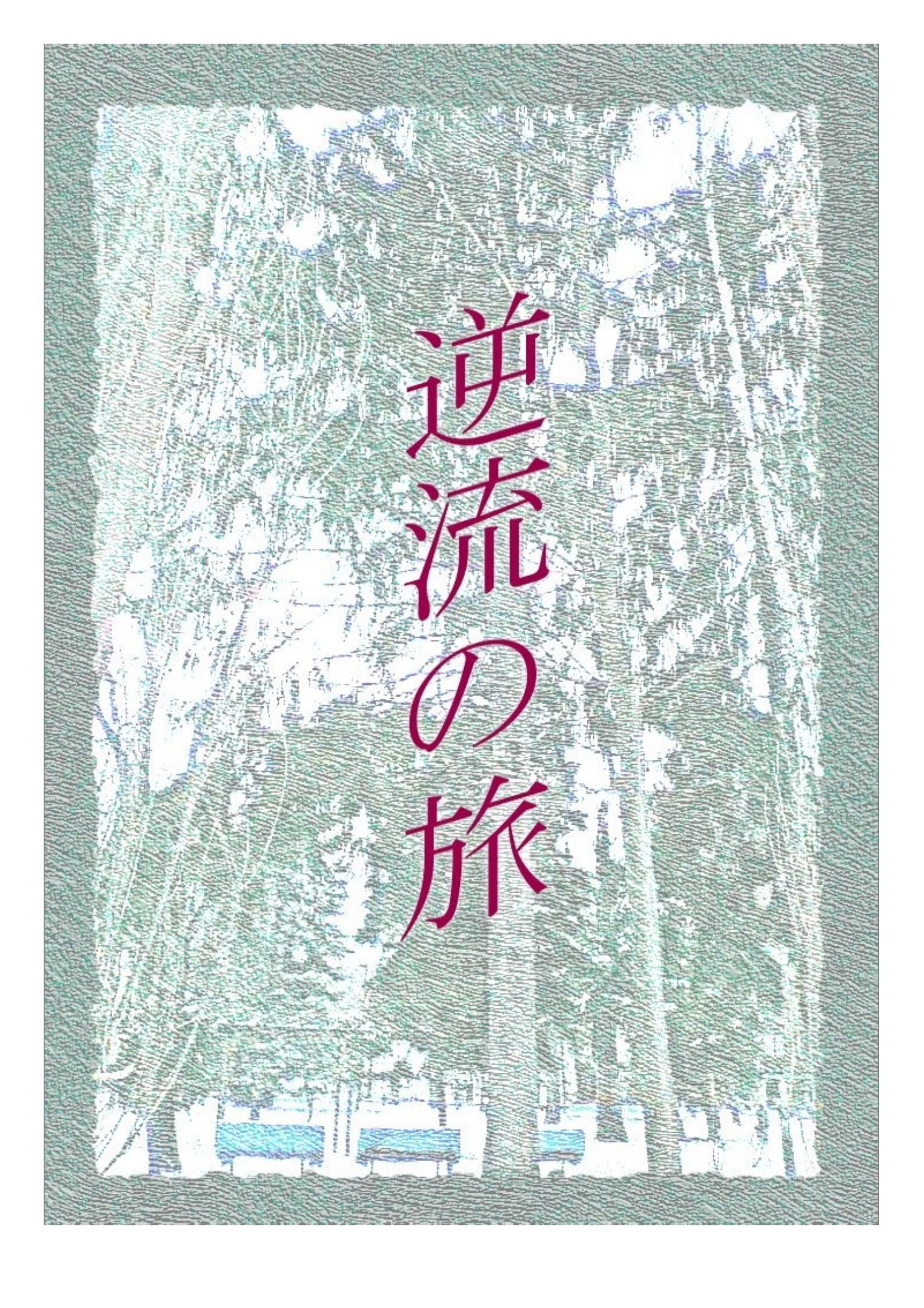
陽に

凍える

一面の白に

ぬくもりは

影だけ



逆流 の 旅

巖かに

生き

朽ちてゆく

えぞまつ

蝦夷松は

天だけを見る

天然に

太古からの

軋まれた岸壁

決意に

風や

今もなお

波の

轟く

歯形を晒して

おみね
男峰

連れて行かれない

ほどの

絶唱

風の岬にて

聞く

何の為の

ひとり

か

北へと向く

この爪先

オーロラ
極光

意志あるものの

ように

闇を透かして

闇の輝き

放たれた矢を

追つて

弓弦ゆづるもまた

震える

星の余韻

飛び交う

目線で

ぎあぎあぎあ

海鳥の喧騒

熱い

エゾシカが

それぞれの系譜を

こつちを見てる

刻むため

見つめあう

鹿は森へ

一線で繋がる

そして私は

祖の記憶

帰らない

青ブルー

灰グレイ

どの世の果ても

凄まじい

海鴉の群れ

わたしを生かす

逆流の

烈しさ

その源を

辿る旅なのだ

着地 点



人ならば

間近で

こころの辺り

初めて見た

あの巖の

大雪山系

何合目かに

思っていたより

湖があると云う

優しげな貌

おいで

どこまでも

山、空、雲の海

せつなさの

果てのまた果てへ

パラグライダーの
浮遊度に
合わせて
流れる
丘の時間

小さな美瑛びえいの小学校

夜にはきつと

キンコーン

星の音が

響き渡る

丘と空との
境目が

銀色に霞む

いま地球の

一片に立つ

後書きっぽく謝辞

自分自身にも出口を見いだせなくなったとき、無駄に悩まず逃げる。

行先は大いなる自然、まだ知らぬ街並み、あてのない旅。

もちろんただでは帰らないつもりで。

心震える手土産を抱えて戻った時には、きっと忘れている。

そして最初の行に戻ってエンドレス。

毎年雨の季節に重なってすぐ散る桜と気がつけば冬になってて余韻もへったくれもない秋の歌は外しました。

もののあはれが判る人間は好きですが、我ながら自身はそれを判っているかが疑問なこの頃。

それでもずっと感謝の念を持ち続けるだろう、たとえこの地を離れる時が来ても。

北海道。

アイヌモシリ。

ありがとう。

あなたに包まれて生きてこられた。

いつかあなたの全てを飲み込んで一つになれるような歌を生む。

2011年1月 寒波の夜